

北土山系開発地域

土地分類基本調査

焼石岳

5万分の1

国土調査

岩手県

1981

ま え が き

本県の農業は、他の主要農業県と比べて厳しい条件下にありながら、国民食糧の総合供給県としての地位を着々と築きつつありますが、更に、豊かで住みよい生活環境を整えながら、開発と保全の両面で調和のとれた土地利用を進めてゆかなければならない。

とくに農林業部門では、需要の変化を見つめながら、これに対処し食糧や林産物の安定的な供給と、生産性の高い大規模な生産基地が必要であり、全国的な土地利用の再編成という見地からも本県の恵まれた広大な土地を有効に利用し、観光的機能も含めた農畜産物、林産物の一大供給基地として開発を促進するとともに、豊かな自然環境の保護に努めなければならない。

したがって、土地の基本的性格を規定している地形、表層地質、土壌及び関連事項等の自然的条件を科学的、かつ総合的に調査し、その結果を相互的に有機的に組合せ、土地利用の可能性を見出すことが必要である。

以上の観点より、都道府県が行なう土地分類基本調査として国土庁より指定を受け、岩手県土地分類基本調査作業規程に基づき、建設省国土地理院発行の縮尺5万分の1地形図「焼石岳」を基図として調査を行なったものであり、地域の特性に応じた開発方式、保全及び防災対策等利用の適正化のため、広く関係者の方々にご利用いただければ幸いです。

なお、この調査にあたって、資料の収集、調査、図簿の作成等にご協力いただいた機関並びに関係各位に対し深く感謝申し上げます。

昭和 56年 12 月

岩手県農政部長 佐藤 宏 三

目 次

まえがき

総 論

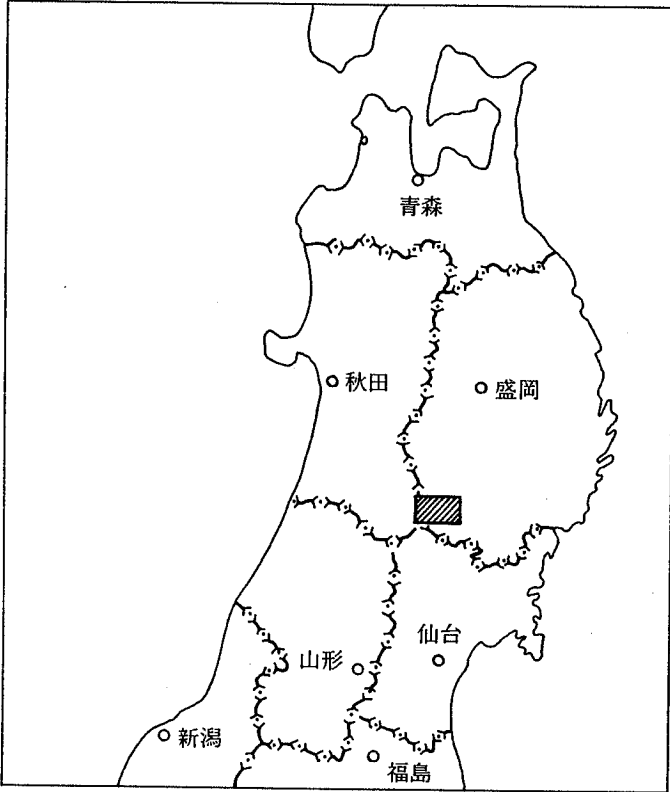
I 位置及び行政区界	1
1 位 置	1
2 行政区界	1
II 地域の特性	3
1 自然的条件	3
2 社会経済的条件	5
3 土地利用の概況	7
III 主要産業の概要	9
IV 開発の現状と方向	12

各 論

I 地形分類	13
1 地形概説	13
2 地形各論	14
II 表層地質	18
1 表層地質概説	18
2 表層地質各論	19
III 土 壤	22
1 山地および丘陵地の土壌	22
2 台地および低地の土壌	24
IV 傾斜区分	26
V 水系・谷密度	28
VI 防 災	29
VII 起伏量	32

あとがき

位置図



総論

I 位置及び行政区界

1 位置

この図幅の地域は、岩手県西側南部に位置し、20万分の1地勢図「新庄」図幅に含まれる。

図幅縁辺の経緯度は北緯 $39^{\circ}00'$ ～ $39^{\circ}10'$ ，東経 $140^{\circ}45'$ ～ $141^{\circ}00'$ であって，図幅の実面積は 399.86 km^2 である。

なお，今回の調査地域は岩手県地域のみである。

2 行政区界

この図幅内に含まれる市町村は，湯田町，金ヶ崎町，胆沢町，衣川村及び一関市の各一部が含まれ，調査地域外は秋田県管内で第1図に示すとおりである。

第1図 行政区界



この図幅内の市町村別面積は、第1表に示すとおりである。

第1表 図幅内の市町村別面積

面積 市町村名	図幅内面積		市町村全面積 (km ²) B	A / B × 100 (%)
	実数(km ²) A	構成(%)		
湯田町	0.44	0.1	304.69	0.1
金ヶ崎町	227.17	56.8	179.61	—
胆沢町			279.75	—
衣川村	89.35	22.3	164.50	54.3
一関市	35.14	8.8	407.52	8.6
秋田県(東成瀬村)	47.76	12.0		
計	399.86	100.0		

資料：図幅内実面積……………建設省国土地理院調べ

：市町村全面積……………建設省国土地理院調べ

(昭和55年度全国都道府県市区町村別面積調べ)

II 地域の特性

1 自然的条件

ア 気象条件

本図幅近隣に第2表の観測所がある。

第2表 気象観測所の位置

観測所名	所在地	北緯	東経	水系	図幅内の関係位置
横川目	和賀郡和賀町堅川目1-7	39° 18' 4"	140° 59' 9"	北上川	図幅外
若柳	胆沢郡胆沢町大字若柳字西風100	39° 08' 1"	141° 01' 2"	"	"

資料：農業気象10年報（昭和40～49年）岩手県

本図幅内の地域は、太平洋岸の表日本気候区に属するが、奥羽山系の東側に位置しているため、内陸性の気候を示している。

この観測所における観測結果は第3表のとおりで、年平均気温は、各観測所とも10℃以上で、県内（8℃以下6観測所、8.1℃～9℃ 8観測所、9.1℃～10.0℃ 8観測所、10.1℃～11.0℃ 14観測所、11.1℃以上4観測所）の中でも平均的位置にある。

年降水量は、1,448～1,660 mmで県内（1,000 mm以下1観測所、1,001～1,300 mm 19観測所、1,301～1,600 mm 14観測所、1,601～2,000 mm 3観測所、2,000 mm 以上3観測所）の中でも、平均的位置にある。

なお、月別雨量は夏季の方が多く、農耕に適した地域と言える。

第3表 観測所別気象

観測所名 項 目	横 川 目	若 柳
年平均 気 温 (°C)	10.1	10.2
“ 最高気温 (°C)	14.8	14.6
“ 最低気温 (°C)	5.4	5.7
年 降 水 量 (mm)	1,660	1,448
初 霧 月 日	10.14	10.19
終 霧 月 日	5.4	5.4
積 雪 日 数	133	132
初 雪 月 日	11.14	11.11
終 雪 月 日	4.5	4.3

資料：農業気象10年報（昭和40～49年）岩手県

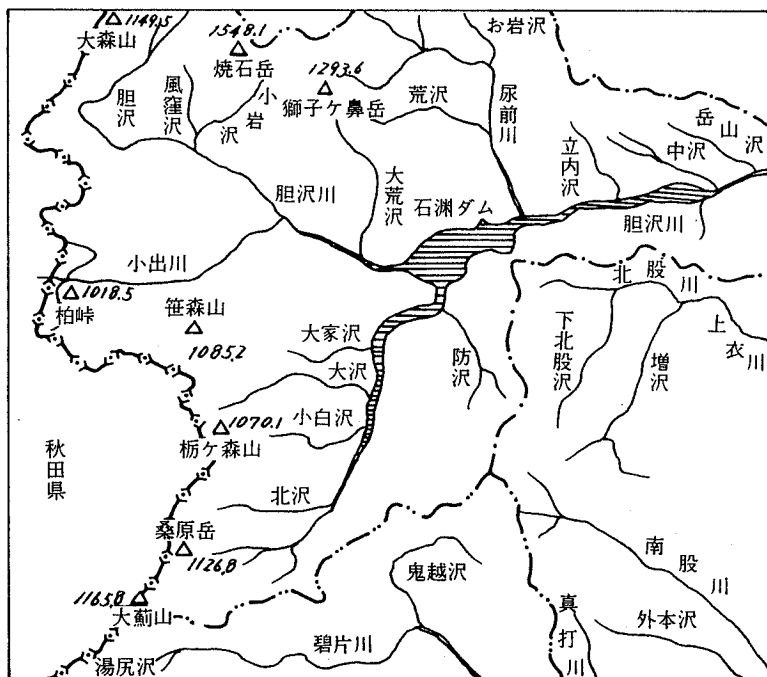
1 土地条件

本図幅西側を奥羽山脈が南北に縦貫しており、標高1,000 mクラスの山が連なり岩手県と秋田県との分水嶺を形成し、これら山々から集水した川は、胆沢川及び磐井川となり、それぞれ北上川に合流し太平洋に出る。

本図幅内の主要河川及び主要山岳は第2図のとおりであるが、この図からも本図幅のほとんどが山地丘陵地でしかも急峻なる地域が多く、胆沢川に築かれた石渚ダム下流及び磐井川に沿って一部農耕地が拓かれているだけで、殆んどが山林原野である。

なお、この地域は、那須火山帯に属する地域にあるが、本図幅内には温泉地群は見当らない。

第2図 主要河川並びに主要山岳図

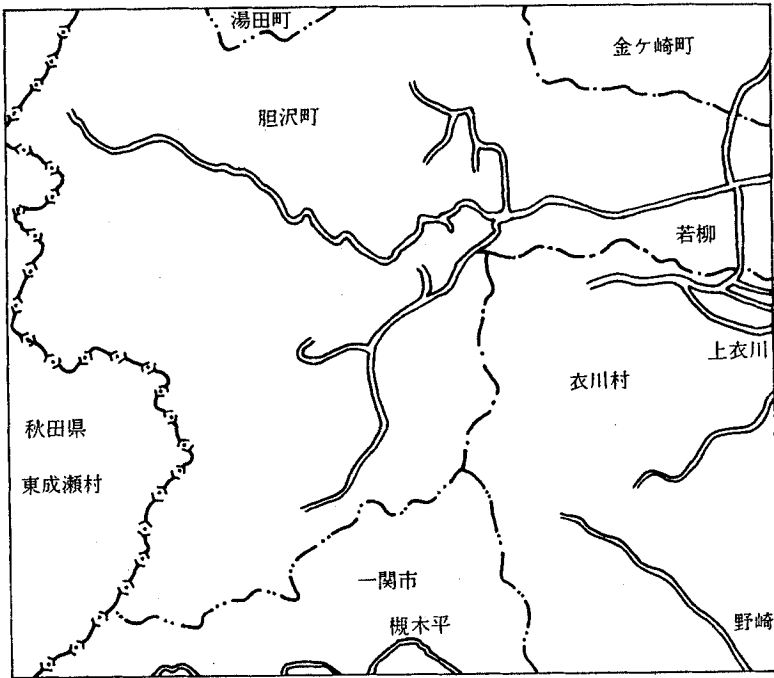


2 社会経済的条件

ア 交通網

本図幅内の交通網は第3図に示すとおりで、この図幅内道路は殆んど林道の道路であり、この地域は社会経済的利用度の少ない地域であったと言える。

第3図 主要道路図



イ 人口等の動き

図幅内関係市町村の人口の動きは第4表のとおりで、 km^2 当り県平均人口密度90.7人にに対し、一関市が1.6倍、金ヶ崎町が0.9倍程度で外3町村は大幅に下まわっている。

一関市は、人口増の傾向にあり、他町村は、減少の傾向にあるが、その減少率は小さくなってきている。

農家人口の動きについては第5表のとおりであるが、昭和45～50年の一般人口と農家人口の推移を比較（一般：a，農家：b）すると、金ヶ崎町 a - 8.8%，b - 16.4%，胆沢町 a - 10.5%，b - 14.6%，衣川村 a - 16.3%，b - 20.4%，一関市 a + 5.9%，b - 20.7%となっており、一関市を除き農家人口の減少率が総人口の減少率を上まわっている。

本図幅内における人口の動向への影響は胆沢町若柳地区のみで、同地区は水田地帯のことから大きな変動はないものと見られるので説明を省略する。

第4表 人口の動き

年次 市町村名	昭和40年	45	50	50 / 40	50 / 45	人口密度 (50年)
湯田町	9,279 ^人	7,379 ^人	6,045 ^人	65.1 [%]	81.9 [%]	19.8 ^{人/㎡}
金ヶ崎町	16,067	14,872	14,653	91.2	98.5	81.6
胆沢町	19,020	17,691	17,032	89.5	96.3	57.2
衣川村	6,426	5,773	5,378	83.7	93.2	32.7
一関市	57,238	55,830	59,122	103.3	105.9	145.1
県合計	—	1,371,383	1,385,563	—	101.0	90.7

資料：国勢調査

第5表 農家人口の動き

年次 市町村名	昭和40年	45	50	50 / 40	50 / 45	農家人口 総人口 (50年)
湯田町	3,257 ^人	2,720 ^人	2,382 ^人	73.1 [%]	87.6 [%]	39.4 [%]
金ヶ崎町	12,690	11,430	10,612	83.6	92.8	72.4
胆沢町	17,782	16,456	15,367	86.4	93.4	90.2
衣川村	6,050	5,370	4,815	79.6	89.7	89.5
一関市	27,428	24,289	21,742	79.3	89.5	36.8

資料：昭和40, 50年は農業センサス, 45年は農林業センサス。

3 土地利用の概況

本図幅に係する市町村の土地利用状況は第6表に示すとおりであるが、耕地率は各市町村（湯田町については本図幅内占有面積が極少なので考慮に入れない）ともほぼ県平均及び平均以上であり、気象条件と合せ農耕に好都合な条件にあり、県内でも一大穀倉地帯である。

本図幅内における土地利用状況は、図幅東側の若柳地区に水田が拓かれているのみで殆んどが山林原野である。

第6表 土地利用の概要

(ha)

区分 市町村名	土地 総面積 A	経営耕地						
		経営耕地 総面積 B	田 C	畑				樹園地
				計	普通畑	牧草 専用地	未作地	
湯田町	30,469	654	504	149	44	102	2	1
金ヶ崎町	17,961	4,111	3,360	719	438	252	29	32
胆沢町	29,775	5,180	4,650	510	334	138	38	21
衣川村	16,450	1,466	1,190	248	84	164	—	28
一関市	40,752	5,733	4,300	1,130	689	441	—	303
県合計	1,527,794	147,704	94,649	47,955	30,528	14,400	3,027	5,100

区分 市町村名	耕地以外の土地									
	林野面積 D = E + G	現況 森林面積 E	森林計画 による 林面積 E'	うち 人工林 F	森林以 外の 草地 G	耕地 率 B/A	水田 率 C/B	林野 率 D/A	人工 林率 F/E	
湯田町	26,684	26,148	25,261	4,550	536	2.1	77.1	87.6	18.0	
金ヶ崎町	7,319	7,240	7,358	2,409	79	22.9	81.7	40.7	32.7	
胆沢町	17,665	17,370	17,392	2,257	295	17.4	89.8	59.3	13.0	
衣川村	13,420	13,226	8,752	1,892	194	8.9	81.2	81.6	21.6	
一関市	26,622	26,493	18,785	4,696	129	14.1	75.0	65.3	25.0	
県合計	1,187,876	1,095,875	1,096,170	296,577	92,001	9.7	64.1	77.8	27.1	

資料：経営耕地は昭和50年農業センサス

：耕地以外は1970年農林業センサス（林業編）

Ⅲ 主要産業の概要

本県の主産業は、昭和40年代以前は第1次産業であったことは言うまでもないが、最近では農村からの人口流出等もあり、第2次産業、第3次産業にその座を奪われ、その差は年々大きくなっている。

この比率を産業別就業人口及び産業別純生産で見ると第7表及び第8表のとおりである。

この図幅内関係市町村を見るに、金ヶ崎町、胆沢町、衣川村とも第1次産業人口が各50%以上を占めており、農村としての形態を程している。それに対し、一関市は第一次産業人口が26.4%と都市近郊型農業とすることができる。言いかえれば一関市は都市としての形態を着実に築いて来ていることを示す。これら市町村の産業別就業人口比率と産業別純生産比率を比較すると第1次産業では人口率より純生産比率が下っている。すなわち人口比率と生産額比率の不均衡は労働生産性の不均衡であり、所得格差を示すものである。

本図幅内における主要産業については、上部東側の胆沢町若柳地区の稲作のみである旨前述したとおりである。

第7表 産業別就業人口

(単位：人、()内%)

産業別 市町 村名	総 数	第 一 次 産 業			
		計	農 業	林 業 狩 猟 業	漁業水産 養 殖 業
湯 田 町	3,237 (100.0)	974 (30.0)	839 (25.8)	135 (4.2)	3 (0.0)
金ヶ崎町	8,702 (100.0)	4,527 (52.0)	4,511 (51.8)	16 (0.2)	— (0)
胆 沢 町	10,525 (100.0)	6,757 (64.2)	6,663 (63.3)	94 (0.9)	1 (0.0)
衣 川 村	3,201 (100.0)	2,105 (65.7)	2,095 (65.5)	7 (0.2)	— (0)
一 関 市	29,773 (100.0)	7,864 (26.4)	7,727 (25.9)	129 (0.4)	8 (0.0)
県 合 計	702,574 (100.0)	244,710 (34.8)	219,125 (31.2)	6,843 (1.0)	18,742 (2.6)

(単位：人，()内%)

市町村名	第二次産業				第三次産業 及びその他
	計	鉱業	建設業	製造業	
湯田町	1,026 (31.6)	192 (5.9)	375 (11.6)	455 (14.1)	1,241 (38.4)
金ヶ崎町	1,849 (21.2)	14 (0.2)	602 (6.9)	1,233 (14.1)	2,326 (26.8)
胆沢町	1,687 (16.0)	26 (0.2)	648 (6.2)	1,013 (9.6)	2,081 (19.8)
衣川村	443 (13.8)	6 (0.2)	143 (4.5)	294 (9.2)	653 (20.4)
一関市	7,267 (24.4)	78 (0.3)	2,520 (8.4)	4,669 (15.6)	14,642 (49.2)
県合計	161,128 (22.9)	3,594 (0.5)	65,791 (9.4)	91,743 (13.0)	296,736 (42.3)

資料：昭和50年国勢調査報告

第8表 産業別純生産

(単位：千円)

市町村別	総数	第一次産業			漁業水産 養殖業
		計	農業	林業 狩猟業	
湯田町	4,706,070 (100.0)	809,534 (17.2)	569,098 (12.1)	234,379 (5.0)	6,057 (0.0)
金ヶ崎町	12,360,546 (100.0)	4,424,090 (35.8)	4,391,473 (35.5)	31,887 (0.3)	730 (0.0)
胆沢町	12,945,938 (100.0)	5,595,208 (43.2)	5,483,255 (42.4)	106,539 (0.8)	5,414 (0.0)
衣川村	4,373,722 (100.0)	1,654,898 (37.8)	1,328,478 (30.4)	324,174 (7.4)	2,246 (0.0)
一関市	62,778,141 (100.0)	5,331,468 (8.5)	5,082,603 (8.1)	248,865 (0.4)	— (0)
県合計	1,279,085,876 (100.0)	202,686,928 (15.8)	151,271,468 (11.8)	16,318,548 (1.3)	35,096,912 (2.7)

(単位：千円)

産業別 市町 村別	第二次産業	第三次産業
湯田町	1,293,619 (27.5)	2,602,917 (55.3)
金ヶ崎町	3,441,904 (27.8)	4,494,552 (36.4)
胆沢町	2,701,993 (20.9)	4,648,737 (35.8)
衣川村	1,357,981 (31.0)	1,360,843 (31.2)
一関市	17,895,994 (28.5)	1,360,843 (31.1)
県合計	335,615,706 (26.2)	740,783,240 (58.0)

資料：昭和50年岩手県の市町村民所得

IV 開発の現状と方向

この図幅内の関係市町村のうち、湯田町と一関市については本図幅の占有面積が少な
いことから胆江広域生活圏としての、金ヶ崎町、胆沢町、衣川村について述べる。

この町村の産業は、土地条件、交通、水利、気候等の各種条件により、水田、畜産、
野菜、等の農業中心の第1次産業である。

まず金ヶ崎町においては国営パイロット事業による酪農の基盤整備がされる等、米作
りとともに農業の基盤整備が進められている。又、環境整備では更生年金事業団による
スポーツセンターの建設が一部完了している。

県でも積極的に推進中の中部工業団地（314 ha）への企業誘致については現在50%が
誘致されているが、早期に企業誘致が完了されることが望まれているところである。

胆沢町においては、奥羽山系開発としてスキー場の開設の計画があり、その調査中
であり、また農業基盤の整備として国営の胆沢平野土地改良事業が調査計画中である。

衣川村においては、農村総合モデル事業が昭和54年に着手され昭和63年に完了予
定である。

計画中の事業では、県営畜産環境事業、森林総合整備事業等があり、またスキー場
の設置2ヶ所の計画のうち一ヶ所については昭和54年に開設され、一ヶ所については現
在設置計画中である。

また、胆江広域経済圏として水沢市、江刺市、前沢町を含めた、遠隔農村地域広域工
業導入定住促進対策モデル事業構想がある等、農村先進地域としての当該地域の将来は、
商工業と農業とが、豊かで調和のとれた地域となり得る条件を備えており、それらに向
かって高速交通時代に対応した新しい町づくりと地域開発がなされることであろう。

本図幅の地域内の開発も、これらの計画に沿って進められることになる。

なお、図幅内関係市町村の「草地造成年度別実績」第9表を参考のため示した。

第9表 草地造成年度別実績

(単位：ha)

年度 市町 村名	50年迄	51	52	53	54	55	計
湯田町	259.2	28.8	19.7	14.8	1.0	3.8	327.3
金ヶ崎町	485.6	—	22.3	20.8	0	0	528.7
胆沢町	147.0	—	—	7.0	—	—	154.0
衣川村	218.7	—	32.1	5.5	15.0	8.6	279.9
一関市	672.5	19.9	6.3	1.8	11.1	5.4	717.0

資料：県畜産課調（農地開発事業及び地全協の事業は含まず）

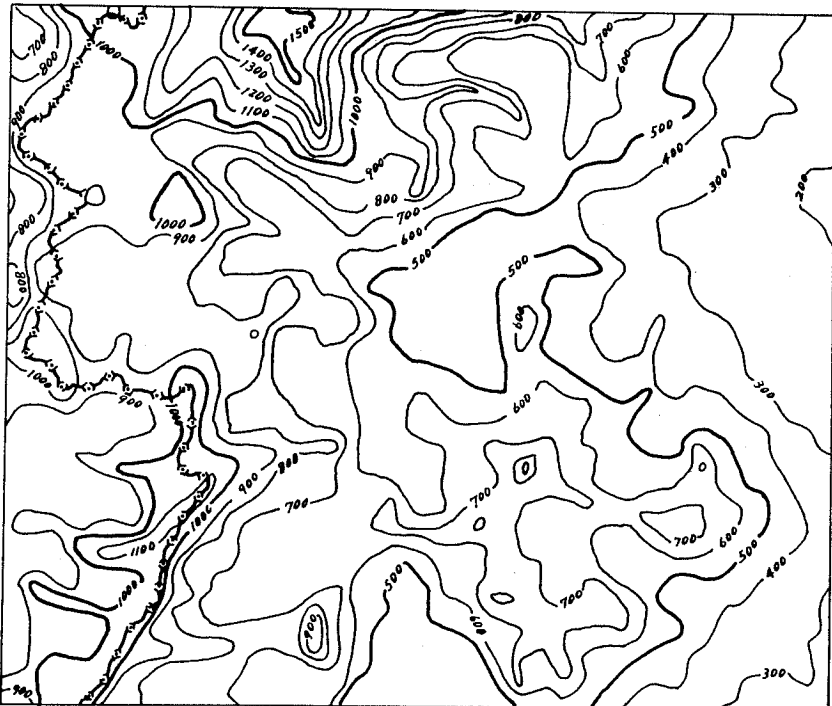
各 論

I 地形分類

1 地形概説

本図葉は岩手県の南西にあって、図葉西部に南北方向に秋田県との県境が伸びている。図葉内における最高点は図葉北西部に位置する焼石岳の1,548 mである。また最低値は胆沢川が東図郭線を越える所で、海拔約140 mである。切峰面図でみると、図葉の北東部に1,500 mを越える焼石岳山地があり、図葉西部の県境を成す真昼山地が海拔約1,000 m前後で南北に伸びている。図葉の南東部には高松能山(927 m)を最高とする高手山山地が広がっている。これらの3つの山地を分けるようにして、焼石岳山地の南縁を胆沢川が流れ、また真昼山地と高手山山地の間を胆沢川の支流である前川が流れている。途中胆沢川本流と前川との合流点には石淵ダムがある。図葉北東部は丘陵地、台地、低地が分布し、本図葉内で最も低い所である。

第1図 切峰面図



また図葉南部には磐井川の一部が流れており、その右岸側（南側）には栗駒山の山地の一部が顔をみせている。本図葉に分布する地形区は以下のとおりである。

I 山地

- | | |
|-----------|-----------|
| I a 焼石岳山地 | I b 真昼山地 |
| I c 高手山山地 | I d 横根岳山地 |
| I e 栗駒山山地 | |

II 丘陵

- | | |
|-----------|--------------|
| II a 永栄丘陵 | II b 北股丘陵 |
| II c 南股丘陵 | II d 高手山山麓丘陵 |

III 台地

- | | |
|------------|------------|
| III a 胆沢台地 | III b 衣川台地 |
| III c 前川台地 | |

IV 低地

- | |
|-----------|
| IV a 胆沢低地 |
|-----------|

2 地形各論

(I) 山地

a 焼石岳山地

焼石岳山地は前記したように本図葉中最高海拔高度を有する第四紀の火山である。この焼石岳火山は岩手山等のような独立峰的な火山ではなく、幾つかの峰に分れている。それらの主な峰をあげると、焼石岳（1,548 m）、横岳（約1,540 m）、三界山（1,381 m、川尻図葉内）、天竺山（1,318 m、川尻図葉内）、経塚山（1,372 m、川尻図葉内）等である。焼石岳は現在ほとんど活動を停止しているが、空中写真で見ると、焼石岳と横岳との鞍部の南西斜面に極めて小規模であるが噴気が認められる。この焼石岳火山の地形的特徴は、焼石岳、天竺山に代表されるドーム状の頂上と、その周辺の緩斜面が広いことが第1にあげられるが、地形分類図ではこの緩斜面域は小起伏火山地で表現してある。これら緩斜面域は火山体が形成された当時のオリジナルな面が残されているのだが、このような火山形成時の原斜面と侵食を受けている面の区別は比較的容易に出来る。これらの緩斜面のうち、横岳から獅子ヶ鼻岳に拡がる緩斜面はその典型的なものであり、そして緩斜面を取りまく侵食斜面との境界は極めて明瞭である。このような緩斜面は、熔岩がきれいに流れて斜面を形成したものであるが、地形分類図で小起伏火山地で表現

した所は、この種の緩斜面ばかりではなく、恐らく、前記の緩斜面に代表される火山体が形成されたあと、泥流状の熔岩が流出したと思われ、そのような泥流地形的な緩斜面域も、小起伏火山地で表現した。このような泥流地形の顕著なのは、焼石岳の東側に石淵ダムに向っている斜面で、獅子ヶ鼻岳、横岳、焼石岳、天竺山、鍋割山に囲まれた範囲である。切峰面で見ると、この範囲は上記の諸峰に比較して著しく高度が低く、ちょうど大規模な地すべり地の様な形態を示している。そしてこの巨大な凹地部は比高は小さいものの、かなり凹凸に富んでいる。従って局部的には完全な凹地もあり、池沼も幾つか散在している。この巨大な凹地部の緩斜面と前記の頂上付近に分布するような緩斜面とは全く異なった容貌を示している。背後の諸峰との間の絶壁のような斜面等から見ると、火山体の大部分は横岳、獅子ヶ鼻岳の緩斜面に代表されるようなかなり単純な山容を呈していたと思われる。その後、恐らく会津の磐梯山の様な爆裂的噴火のような形で泥流を押し出し、現在の形になったものとも考えられる。

現在のところ解析はまだ始まったばかりであり、胆沢川や尿前川の支谷による侵食が低い方でみられるが、尿前川源流部の焼石岳から天竺山にかけての急斜面では谷頭侵食が激しく、斜面崩壊が著しい。またこのような泥流状地形のところは地質も乱れており、侵食には弱いので、小さな支谷の谷頭侵食でも土砂生産が激しくなる場合もある。

b 真昼山地

真昼山地は、はるか北部の和賀岳（1,440 m、鶯宿図葉内）の南より始まり、秋田県との県境として南に伸び、栗駒山にまで続く長大な山地である。途中、焼石岳火山によって分断された形になっている。本図葉内では900～1,100 m位の定高性をもっている。主に泥砂岩、凝灰岩、安山岩類からなり、解析の進んだ山地である。特に秋田県側では侵食が著しく、斜面崩壊がいたる所にみられる。従って起伏量も岩手県側に比べて秋田県側の起伏量が大きい。岩手県側は主に中起伏の山容を程するが、所々小起伏山地もみられる。また地形分類図で見ると、岩手県側にはところどころに遷急点の記号が散見される。この様な遷急点記号がある場合、この記号より下流部では侵食が進みつつあり、現在の谷、および斜面であるのに対して、記号より上流部は、一時代前の谷、あるいは斜面であり、現在の定常的な侵食の及んでいない所である。従って、この遷急点記号が多くみられる岩手県側は、まだ完全に解析が進んだとは言えない山地である。本山地では所々に地すべり地がみられ、特に図葉北西隅の秋田県側に顕著にみられる。

また、西側隣図の稲庭図葉に含まれるが、秋田県の雄物川の支流である椿川に沿っても、相当数の地すべり地をみる事ができる。しかし、岩手県側ではそれ程みられず、

下風江にみられるものと、大森山北斜面にみられるのが顕著なものである。ただし、地形分類図には表示していないが、小胡桃山の南斜の緩斜面域が地すべり地に似ている点が気になるところである。

c 高山山地

本山地は、ドーム状の独立峰的な山地の集まった所であり、主な峰を記すと、高松能山(927 m)、高山(867 m)、祭時山(990 m)、国見山(788 m)、風倉山(779 m)、鈴ヶ森(753 m)、高眉山(678 m)、小滝森(766 m)、媚山(684 m)等がみられる。安山岩質岩石、および凝灰質岩石より成るが、安山岩質岩石より成り、かつ、比較的解析の進んでいない高松山と高眉山を火山山地で表現し、高松山の緩斜面域は小起伏火山地で表わした。起伏量は概して大きくはなく、祭時山の400～500 mを除けば、ほぼ全域にわたって300 m以下の起伏量を示す所が多い。谷密度は磐井川流域、および支流の南股川流域で高く、前川流域では若干低くなっている。前記の諸峰の頂部はまだ解析が及んでおらず、きれいなドーム状を残している。斜面崩壊はあまりみられないが、地すべり地が3ヶ所に見られる。

(II) 丘陵

永栄丘陵は大別すると、海拔高度が高く、起伏量の若干大きな所と、海拔高度が低く、起伏量の非常に小さな所とに分かれる。地形分類図では前者を丘陵地Ⅰ、後者を丘陵地Ⅱとして表現した。北股丘陵は、北股川左岸側に北股川に沿って細長く伸びている丘陵地Ⅱであり、起伏量は極めて小さく、永栄丘陵の丘陵地Ⅱと同時代の形成と考えられる。また南股丘陵は北股川の右岸に沿って高山山地を縁取るようにして分布しており、南部の高山山麓丘陵地に連続する。起伏量は若干大きく、100～150 mで丘陵地Ⅰで表わした。

(III) 台地

本図業内には、胆沢台地、衣川台地、前川台地が現われるが、このうち、衣川台地と前川台地は、北股川、前川によって形成された谷底平野の段丘化したものであり、狭長である。両者とも極めて連続性の良い段丘面が上流にまで発達しており、それぞれ2段の面からなる段丘群である。2段のうち上位のものは非常に連続性が良く、これを砂礫段丘Ⅱとした。下位の段丘はそれ程連続しておらず、散在的に分布する。上位のものはその連続性の良さから、胆沢台地の3段から成る砂礫段丘Ⅱのどれからの面と同時代に形成されたと考えられる。

胆沢台地は、胆沢川によって形成された扇状地が、その形成過程に於て段丘化したも

のである。本図葉にはその扇状地の扇頂部のみが含まれるだけであるが、東隣図の水沢図葉内では広く拡がっている。大きく分るとほぼ5段の高さの異なる面に分けられ、ここでは一番高く、若干丘陵地の形態に似た面を砂礫段丘Ⅰとした。また、谷底平野からの比高が数m位の最も低い面を砂礫段丘Ⅲとし、最も連続性の良い中間の3段を砂礫段丘Ⅱとして表現した。これらの全ての段丘面は下流の扇端部では谷底平野が網目状に入り込んでおり、扇状地の特長がよく現われている。本図葉内の台地部にも数本の谷底平野が入り込んではいるが、それらは底の浅い、明瞭な谷底平野ではない。

(Ⅳ) 低地

本図葉内には目立った規模の平野は分布せず、胆沢川、北股川、南股川、前川、磐井川に沿って細長く伸びている谷底平野が分布するのみである。

(株式会社 地域開発コンサルタンツ 石野公一)

参 考 文 献

- 岩手県（1956）岩手県地質図及び同説明書Ⅰ(Ⅱ)10万分の1図
 経済企画庁（1963）土地分類基本調査「水沢」
 岩手県（1975）土地分類基本調査「北上」
 岩手県（1978）同 上 「一関」
 岩手県（1976調査）同 上 「栗駒山」
 岩手県（1978調査）同 上 「川尻」
 経済企画庁（1974）1/20万 土地分類図「岩手県」

Ⅱ 表層地質

1 表層地質概説

本図幅地域は秋田県側が日本海に注ぐ雄物川水系，岩手県側が太平洋に注ぐ北上川水系の胆沢川，磐井川の流域で分水界が東北日本を表日本と裏日本に二分する脊梁山地（奥羽山地）の地域である。

この地域を構成する地質の基盤は古生層および花崗岩で笹森山，下鉢山，桑原岳付近に分布している。これらを覆って新第三紀中新世のグリーン・タフ活動の火山活動を中心にした火山岩類と堆積岩類が図幅の全域にわたって分布している。さらに新期火山岩類がこれらを買入あるいは被覆している。新期火山岩類は焼石岳，笹森山，大森山，高松能山，雨田森，鈴ヶ森といった点在のしかたで分布している。

表層の堆積物は胆沢川の扇状地堆積物，火山砕層岩，崖錐・土石流堆積物などがある。

第1表 「焼石岳」図幅層序区分表

地質時代		地質(岩層)名	岩石の種類	固結の狀態	
新 生 代	第四紀	沖積世 現河床堆積物 崖錐・土石流堆積物 扇状地・段丘堆積物	砂・礫・泥 碎屑物	未固結	
			扇状地・段丘堆積物		砂・礫・泥・碎屑物
	洪積世	新期火山岩類	安山岩・石英安山岩	固結	
			火山碎屑物	未～半固結	
	第三紀	鮮新世	大平層	砂岩・礫岩・火山碎屑物・凝灰岩・集塊岩	半固結～固結
		中新世	瑞山層	石英安山岩・石英安山岩質凝灰岩・凝灰質砂岩	固結
下嵐江層	凝灰質砂岩・泥岩・灰角礫岩				
前川層・山内層	硬質頁岩・砂質頁岩				
小出川層・小繫沢層	角礫凝灰岩・砂質凝灰岩・砂岩・頁岩				
		胆沢川層・川尻層	変朽安山岩熔岩・同質集塊岩・凝灰岩		
中生代	白亜紀？	花崗岩類	花崗閃緑岩		
古生代	二疊紀？	古生層	粘板岩・輝緑凝灰岩・雲母片岩・石灰岩		

2 表層地質各論

(1) 未固結堆積物

ア 砂礫 g₁

本図幅には胆沢川、磐井川などの河川および支流に沖積地が発達している。胆沢川、北股川、南股川、磐井川には沖積段丘の発達がみられる。

沖積層は背後地の地質の状況から火山岩の礫を主体とした粗粒堆積物の分布が優勢であるが石淵ダムのダム湖では砂・シルトのような細粒堆積物が例外的にみられる。礫の多くはこぶし大から人頭大程度の大きさで、さらに大きなものも少ない。

礫の種類は、火山岩が圧倒的に多い。礫は円磨度があまり高くなく歪角礫ないし角礫程度である。

イ 碎屑物 l

碎屑物には、崖錐・崖錐性扇状地、土石流堆積物がある。土石流堆積物は溪床内にとどまっている。崖錐・崖錐性扇状地堆積物は主要支川の段丘や河道内におし出されているものもある。

碎屑物が多くみられるのは、前川、北股川、南股川で、凝灰岩や泥岩の分布しているところである。

碎屑物は図示したものの以外に小規模なものは山地内ではしばしばみられ、とくに山地内の林道開設に際して切り取られた洪面からの崩落が顕著である。本図幅地域における地質状況からみて碎屑物は今後も多量に生産されよう。

碎屑物は主として火山岩に由来するこぶし大ないし人頭大の礫を主体とし、砂や粘土質な物質が間を充填している。

ウ 砂礫 g₂

洪積世の砂礫は各河川沿いに断続的に分布する河岸段丘堆積物と胆沢川の扇状地積物である。

砂礫は主として火山岩の礫で大きさは卵大から人頭大のものが多く背後地の地質によって大きさが多少異ってくる。

胆沢扇状地は3つの面からなり上位2面のうえには火山灰、軽石の堆積がみられるが下位面は砂礫層のうえに表土がのっている。火山灰、軽石の厚さは2 m以下で図面上には分布を示していない。

(2) 固結堆積物

ア 砂岩 ss

ssは大平層中の砂質泥岩と下嵐江層の岩石である。砂質泥岩は南で泥質であるが北股川付近では砂岩、凝灰質砂岩等の粗粒なものとなる。下嵐江層は、全体的に凝灰質な岩石が多く泥岩をはさむことも多く地すべりの発生がみられる地層である。

ssは尿前川付近で硬いところがあるが全体的には風化したりして軟らかい岩質である。

イ 泥岩 ms_1 , ms_2

ms_1 は前川層、山内層、 ms_2 は古生層の岩石である。

ms_1 は、硬質頁岩、砂質頁岩、細粒砂岩からなり前川から祭時にかけてと図幅の西北端に分布している。岩相はこれらの地層が互層して分布するため地すべりが起こりやすいところもある。

ms_2 は粘板岩、輝緑凝灰岩、雲母片岩、石灰岩よりなり古生代二疊紀の地層とされている。 ms_2 は硬い岩石であるが節理の発達により数cm程度の大きさの礫となって崩落することがある。石滝山の北方では土石流が起っている。

(3) 火山性岩石

ア 火山碎屑岩 Py

石淵ダム西北方に図示した火山碎屑岩はローム質火山灰を主体としたもので分布としてはさらに広く胆沢川扇状地上でみられるように軽石火山灰をはさんでいる。岩質は未固結ないし半固結とやわらかい。

イ 凝灰質岩石 Tf_1 , Tf_2

Tf_1 は鮮新世の大平層、 Tf_2 は中新世の小出川層、小繫沢層に相当する。

Tf_1 は下部に砂岩、礫岩、砂質泥岩の互層があるが上部には凝灰岩、角礫凝灰岩、砂岩、集塊岩などの互層となり国見山周辺や北股川、内穴沢といったところでは凝灰岩質なものが優勢である。 Tf_1 は岩片に硬いものをもつが全体的には赤色風化をしたりすることがあって比較的ゆるやかな地形とみせていて採草地などの利用がおこなわれているところが国見山東方や鍋割山東方にみられる。

Tf_2 秋田県と岩手県の県境を馬蹄形にとりまいて背斜構造をとって分布している。他に大森山、岳山周辺にも Tf_2 はみられる。

Tf_2 は角礫凝灰岩、砂質凝灰岩、砂岩、頁岩などからなる硬い岩石である。

ウ 安山岩質岩石 Ab_1 , Ab_2

Ab_1 は新期火山岩類、 Ab_2 は胆沢川層、瑞山層の岩石である。

Ab_1 は、焼石岳から上倉山、岳山にかけてまとまって分布するほかは第三紀層に貫入しておりその分布は10ヶ所以上もある。 Ab_1 は岩石学的には数種の安山岩類からなる。

石淵ダム付近にある猿岩は石英安山岩で柱状節理が顕著に発達した熔岩である。Ab₁は全体的に極めて硬い岩石で焼石岳から獅子ヶ鼻岳につらなる山容は見事である。

Ab₂は、前川よりも東側に分布する石英安山岩質な瑞山層と、胆沢川の上流部とTf₂の内側にあつて奥羽山地の中心部に分布する変朽安山岩熔岩、同質集塊岩、凝灰岩よりなる胆沢川層の岩石である。

Ab₂は硬い岩石で急峻な地形を作り出しているが変質作用を受けたりして崩壊地の発生しやすいところも多い。

(4) 深成岩

ア 花崗岩質岩石 Gr

胆沢川上流の笹森山北方に分布するGrは、粗粒完晶質の花崗閃緑岩である。

Grは硬質な岩石で風化部分もやっしまっている。

3 応用地質

本図幅地域では胆沢川をさかのぼって秋田県に通ずる主要地方道の改良工事がなされている。急峻な山地内を通る道路では法面の切り取りが行なわれそれにとまう小規模な落石・崩壊が発生している。

(株式会社 地域開発コンサルタント 目加田義正)

参 考 文 献

岩 手 県 (1956) 岩手県地質図及び同説明書(I), (II)10万分の1図

経済企画庁 (1963) 土地分類基本調査「水沢」

秋 田 県 (1965) 秋田県地質鉱産図

小 貫 義 男 (1969) 北上山地質誌 東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告

平 凡 社 (1970) 地学事典

岩 手 県 (1975) 土地分類基本調査「北上」

岩 手 県 (1978) 同 上 「一関」

岩 手 県 (1978 調査) 同 上 「栗駒山」

岩 手 県 (1979 調査) 同 上 「川尻」

Ⅲ 土 壤

1 山地および丘陵地の土壌

本図幅は岩手、秋田の両県にまたがり、東流する胆沢川、北股川、南股川、磐井川流域の山地と、それに続く北東部の丘陵地とによって占められその大部分は主として林業に利用されている。

この図幅に出現している土壌を断面形態、堆積様式、水湿状態、母材等の違いにより6土壌、14土壌統群、21土壌統に区分したが、それらの出現地と特徴についてまとめると第 表のとおりである。

土壌の分布を概観すると、山地においては岩淵ダム周辺の台地を除いた急峻な地形には、褐色森林土壌、ポドゾル化土壌、岩屑性土壌等が広く分布し、県境付近の沢沿いには岩石地や崩壊地の出現が多い、また、丘陵地には主に黒ボク土壌が分布しているが、赤色系の褐色森林土壌やグライ土壌の分布も見られる。

次に各土壌統群の分布状態を見ると、ポドゾル土壌群のうちヒバ林下に出現する乾性ポドゾル化土壌は高松尾山付近海拔高ほぼ500 m前後の地帯に分布し、それ以外のは海拔高600 m前後から出現している、湿性ポドゾル化土壌のうち腐植の集積が顕著な土壌は海拔高900 m前後から出現し、1,000 m以上になると鉄の集積が特徴的な土壌が広く分布している。

褐色森林土壌群は山地から丘陵地にかけて広く分布しているが、海拔高350 mより低い地帯には赤色系や黄色系の土壌分布が主体となっており、これらの分布地帯とポドゾル土壌群とが分布する地帯の間には一般の褐色森林土壌が広く分布している。また、海拔高600 mから800 m前後の沢頭や緩斜地等には暗色系の土壌分布が見られる。

黒ボク土壌群では主に平地には黒ボク土壌、尾根から緩斜面にかけては淡色黒ボク土壌が出現分布しているのが特徴的である。

その他の土壌群では、県境付近の急斜面から沢沿いにかけて出現分布する岩屑性土壌、岩石地、崩壊地等が特筆される。

また、図幅北東部の細野付近の平坦な沢沿いには過湿なグライ土壌が出現している。

(青森宮林局 松尾弘・三上毅)

第2表 土壌分類表(焼石岳)

土壌群	土壌統群	土壌統	出現地と特徴
岩石地	岩石地	岩石地	河川敷。沢沿い急斜面等の基岩露出地。
岩石土	岩屑性土壌	上岩山統	山地の沢沿い急斜面。表層が剥離した礫質な受蝕土。
黒ボク土	黒ボク土壌	鳥の海統	山ろく平坦地。浮石質火山灰を母材とし、土層は堅密である。
		中沢統	若柳付近の平坦地および丘陵地。下層は砂礫を多く含む深い。
	赤色黒ボク土壌	黒岩統	丘陵地の尾根から斜面。下層は堅密で火山灰の層がある。
	乾性褐色森林土壌	大志田統	山地の尾根から主に凸型斜面。黒色のA層はうすくB層は明るい色調。
褐色森林土	"	東根山統	主に海拔高600 m以下の尾根。A層は暗色でうすくB層に礫を含んでいる。
	"	北股1統	後山、野崎付近の尾根。凝灰岩、砂岩を母材とし、土層は堅密である。
	"	真滝統	主に海拔高400 m以下の尾根から斜面。A層は全体的にうすくB層は堅密である。
	"	大森統	山ろく台地。土層全体赤味をおび堆積状態は密である。
	褐色森林土壌	台川統	山地の台地および緩斜面。層全体堅密な残積土。
	"	南昌山統	山地の沢沿いから斜面中腹沢頭。主に礫を含んだ葡行土。
	"	野崎統	後山付近の沢沿い。凝灰岩、砂岩を母材とし幾分異色土の影響あるものと見られる。
	"	横根岳統	海拔高の高い地帯の緩斜面および台地。断面は暗色で、カベ状、わずかに集積が見られる。
	湿性褐色森林土壌	白見山統	山地の小沢、沢頭。礫を含み水湿に富んだ崩積土。
	ポドゾル	乾性ポドゾル化土壌	高松能山統
七兵衛頭統			主に海拔高700 m以上の尾根から斜面。集積が認められるもの
湿性ポドゾル化土壌		牛形山統	海拔高1,000 m以上に広く分布。集積層が鉄銹色で重粘な土壌。
		荒沢森統	海拔高900 m以上の尾根から斜面。B層に腐植の集積が認められる。
グライト土	グライト土壌	須賀倉山統	高海拔高地帯の尾根。溶層は不明瞭であるが集積層が認められる。
		北股2統	丘陵地沢沿い凹地。水湿に富み土層に斑鉄が見られる。

2 台地および低地の土壌

焼石岳図葉の大部分は、焼石岳を中心とする山地が大部分を占める。農耕地は、図葉東部にあり、山麓傾斜地、丘陵地、胆沢扇状地、河川により形成された谷底平野に分布する。

台地及び丘陵地の土壌は、風積あるいは洪積性の堆積様式をとり、火山灰で被覆されている。この地域の火山灰は、強酸性を示し、亜鉛欠乏、銅欠乏の発生する土壌である。作物の生育も火山灰土壌特有の生育様相を示す場合も多い。

低地は、河川により開析された谷底平野にみられる。

1) 河川低地の土壌

河川低地の土壌は、水田として利用され、各河川の上流域に分布する。

水田土壌にみられる土壌統群は、褐色低地土壌、粗粒灰色低地土壌である。

褐色低地土壌の玉里白岩統は、腐植に乏しい壤・粘質の土壌で、胆沢川左岸胆沢町鹿合付近に分布する。小面積ではあるが北股川、南股川沿いの沖積地にもみられる。

粗粒灰色低地土壌には、豊間根統、沢内太田統がある。両土壌統とも下層に礫層の出現する土壌である。豊間根統は壤質で、永沢川上流の金ヶ崎町細野付近に小面積みられる。沢内太田統は強粘質で、北股川、南股川上流域の衣川村上衣川に分布する。

2) 台地の土壌

台地は大部分が胆沢扇状地にあり、盤井川等の沿岸にも発達する。台地の土壌は、畑、樹園地、牧草地、水田に利用されている。水田は、新規に開田されたところである。

台地にみられる土壌統群は、黒ボク土壌、多湿黒ボク土壌、黄色土壌がある。

黒ボク土壌は、伊原統、堰袋統、板沢統に区分され、洪積性堆積である。伊原統は表層多腐植質の壤粘質土壌で、胆沢町上愛宕、宮沢原、横沢原、衣川村外ヶ沢に分布する。堰袋統、板沢統は下層に礫層が出現する壤粘質の土壌である。表層が多腐植質の堰袋統、腐植質の板沢統は、胆沢町愛宕付近に分布する。

多湿黒ボク土壌には、飯豊統と籬野統がある。飯豊統は表層多腐植質の強粘質土壌で、胆沢町上愛宕、市野々、萩森にみられるほか、一関市祭時、金ヶ崎町永栄付近にも分布する。籬野統は強粘質の腐植に乏しい土壌で、胆沢町萱刈窪、宮沢原、丘山に分布する。

黄色土壌には、表下層とも黄褐色で強粘質土壌の戸沢統があり、衣川村外ヶ沢、一関市祭時付近にみられる。

丘陵地、山麓の土壌は、畑及び牧草地として利用されている。

土壌統群は、黒ボク土壌、淡色黒ボク土壌とがあり、風積性堆積である。

黒ボク土壤の北方統は、表層が腐植質で強粘質の土壤で、金ヶ崎町永栄、胆沢町丘山に分布する。

淡色黒ボク土壤の板橋統は、下層に軽石層のみられる土壤で、金ヶ崎町丘山牧野のみられる。

(岩手県農業試験場 新毛晴夫)

IV 傾 斜 区 分

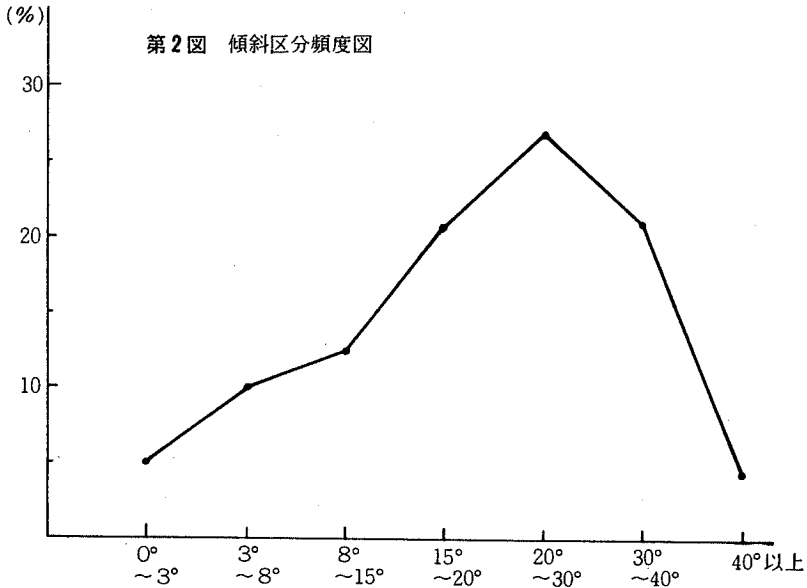
傾斜分類図を作成するに際しては、規定の角度と、となり合う高さの異なる等高線間の水平距離との関係を求め、それにもとづいたスケールを作成し、そのスケールでもって地形図の等高線間の水平距離を任意の位置で測定し、下記に示す規準で分類した。なお、計測および分類に際しては、地形図の精度、あるいは作成したスケールの誤差等を考慮に入れて、スケールおよび規準にはづれても、できるだけ地形の違いを表現するように努めた。

したがって、傾斜が急に变化する所を利用して分類表示してある。

分類規準は下記の表の傾斜区分のとおりである。また、作成された傾斜分類図に5mm方眼をかけ、方眼の交点の傾斜を読み取り、区分毎の頻度を求め、表およびグラフに表わした。

第3表 傾斜区分規準及び頻度

傾 斜 区 分	陸地部分の総交点数 (5mm方眼)	比 率 (%)
3° 未 満	321	4.9
3° 以上 8° 未 満	647	9.9
8° 以上 15° 未 満	799	12.2
15° 以上 20° 以下	1,344	20.7
20° 以上 30° 未 満	1,768	27.1
30° 以上 40° 未 満	1,358	20.8
40° 以上	288	4.4
計	6,525	100.0



以上のようにして作成した傾斜分類図を概観すると、図葉南西部に40°以上の極急斜面がかなり目につき、図葉中央北部に3°~8°の緩斜面がまとまって分布している。前者は秋田県側の流域であるが、斜面崩壊の多い流域であり、現在侵食の盛んな所である。後者は焼石岳火山の一部であるが、ここは普通の熔岩からなる所と異なって極めて複雑な地形を示している所である。地形分類図の項でも説明したように、一見地すべり地に似た地形を呈している。恐らく会津磐梯山のような爆裂タイプの火山活動によって山体破壊が成され、泥石流状の堆積が成された所とみられる。その結果、広く緩斜面が形成されたが、尿前川の兩岸、あるいはその支谷の源流部等は侵食が進みつつあるので30°以上の急~極急斜面が出現している。

(株式会社 地域開発コンサルタンツ)

しく変化している。生産された土砂礫は、ダム湖を埋積するとともに溪床にとどまる傾向にある。

第4表 砂防指定地一覧表

番号	幹川名	溪流名	位 置	指定年月日
1	胆沢川 (北上川)	キツツ川	岩手県胆沢郡金ヶ崎町大字永栄	S 40. 7. 10
2	北上川	胆沢川	岩手県胆沢郡胆沢町大字若柳横岳国 有林	S 30. 11. 25
3	"	南股川	" 胆沢郡衣川村字上衣川	S 48. 12. 7
4	"	磐股川	" 一関市巖美町字真湯	S 31. 1. 17
5	"	"	" "	S 35. 11. 29
6	"	"	一関市巖美町字槻木平	S 41. 8. 9
7	成瀬川 (雄物川)	北股川	秋田県雄勝郡東成瀬村大字椿川	S 42. 3. 22
8	"	沼の又沢川	" " 大字合居	S 50. 4. 30

道路危険地帯には、落石・雪崩・冬期交通止等の項目で、4つの路線が指定されている。(第表)

第5表 道路危険地帯一覧表

番号	道路名	危険区間	危険項目
A	主要地方道横田住田線	岩手県胆沢郡胆沢町石淵ダム～大森山	落石、雪崩 冬期交通止
B	"	秋田県雄勝郡東成瀬村野尻～大森山	雪崩 冬期交通止
C	一般国道342号線	岩手県一関市巖美町真湯～須川	落石、土砂崩 落 冬期交通止
D	主要地方道横田住田線	岩手県胆沢郡胆沢町馬留	落石

このうち、主要地方道横田・住田線は、秋田・岩手両県にわたる山間部に最も大きな危険を抱えている。秋田県側の道路がヘアピンカーブをもって峠(県境トンネル)へ登りつめる一帯は、典型的な地すべり地形を示し、道路開削がこれにどう影響するか継続的な監視を必要とする。岩手県側は、大荒沢を渡るあたりより峠までの路線が全て山腹を切り取り、落石・土砂崩落の危険性をもつ。この危険の大部分は、崖錐性の未固結堆積物を開削したことによるため、崩落が進み安定するまでに、かなりの年月を要す

と思われる。

以上は、人間活動の拡大が自然との接触を増やし、災害を生みだし増加させるという例に相当する。今のところ、冬期（積雪期）の交通は止められ、吹溜り・雪崩等の自然現象が、災害として被害を生み出すに至っていないが、冬期も交通を確保しようとすれば、その災害発生の危険性は飛躍的に増すこととなろう。

参 考 文 献

岩手県防災計画：岩手県防災会議

岩手県水防計画：岩手県土木部

砂防指定地調べおよび砂防指定箇所図：岩手県土木部砂防課

一般国道および地方道落石等通行危険箇所調査：岩手県土木部道路維持課

VII 起 伏 量

起伏量図は、地形図の縦横の各辺を20等分し、それによって作られた基準メッシュ内における海拔高度の最高値と最低値を主として等高線より読みとり、その高度差の絶対値をもって起伏量とした。ここでいう最高値と最低値とは調査者の主観を除く意味で、等高線三角点、独標点、水準点等の客観的数値のみを採用してある。また、それぞれの数値の基準を10m単位として統一するために、三角点、独標点、水準点等の数値では、10m以下の端数は全て切り捨てて読み取ってある。したがって、極めて厳密にみれば、計測の結果得られた数値は、実際の数値に比べて、若干数な目に出ている。

以上のようにして得られた起伏量値をもとに、下記に示すような表に従って起伏量区分を行ない、起伏量図を作成した。また、起伏量図に付随している起伏量数値表では、計測の結果得られた起伏量値の10分の1の値をもって示してある。

第6表 起伏量区分

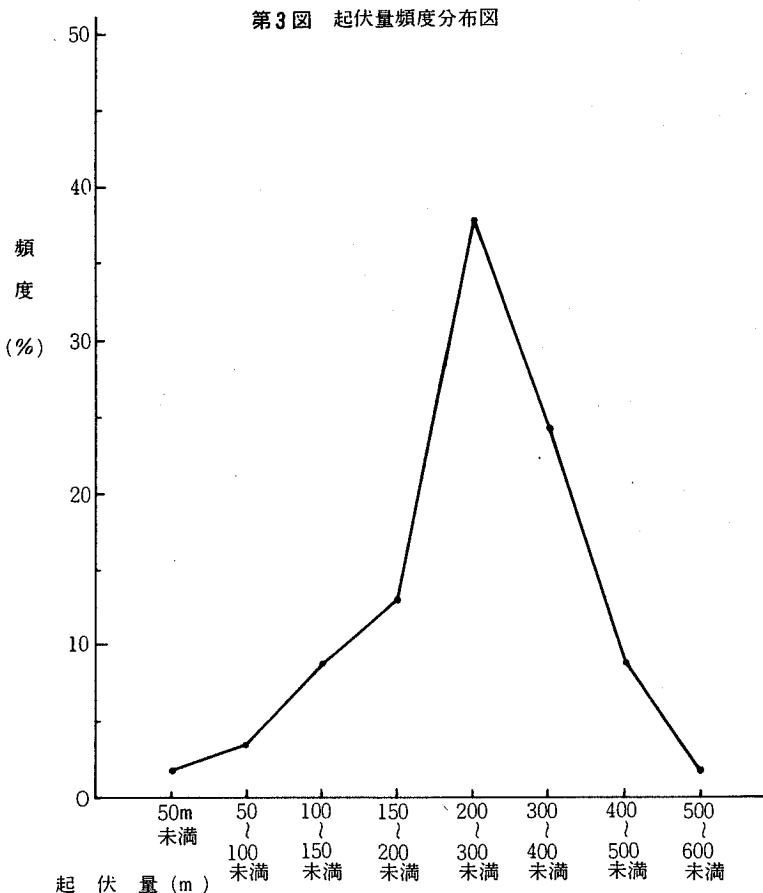
起 伏 量 区 分		区 分 値
	50 m未満	0
50 m以上	100 m未満	1
100 m以上	150 m未満	2
150 m以上	200 m未満	3
200 m以上	300 m未満	4
300 m以上	400 m未満	5
400 m以上	500 m未満	6
500 m以上	600 m未満	7
600 m以上	700 m未満	8
700 m以上		9

以上のようにして作成した起伏量図をもとにして、起伏量頻度分布図と、最高、最低の海拔高度と起伏量との関係を示す山地解析度図を作成してみた。

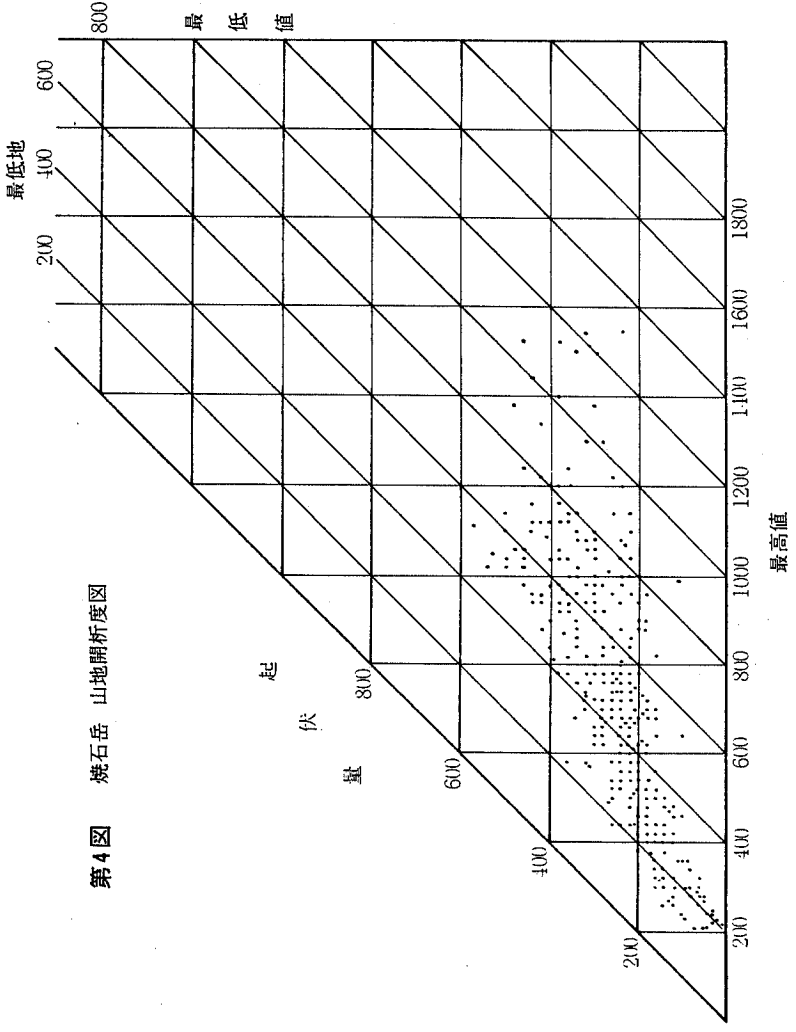
先づ起伏量図でみると、図葉東部で起伏量が小さく、西部で大きい。特に起伏量の大きい所は、横岳、獅子ヶ鼻岳の南西斜面と胆沢川をはさんだその対岸斜面、川尻図葉に含まれる天竺山の南斜面、そして図葉南西部の県境付近である。頻度分布をみると、

200～300 mにピークがあり、全体の40%近くを占めている。山地開析度をみると、最高海拔高度が約800 m位までは海拔高度が大きくなるにつれて起伏量も大きくなる傾向がみられるが、最高海拔高度1,100 m以上になると、起伏量の最大値は500 m以上にはならない。そして、海拔最高値が800 m以上になると、同高度においても起伏量の幅が大きくなっている。これはある程度の高さから上では開析の程度に差がある、すなわち、現在盛んに侵食が行なわれている所と、侵食が及んでいない所があることを示している。従って、大局的にみるならば、起伏量の区分値が変化している周辺で斜面崩壊等が盛んであると推測することができる。

(株式会社 地域開発コンサルタンツ)



第4图 烧石岳 山地開析度图



あ と が き

- 1 本調査は国土調査法（昭和26年法律第180号）第5条第4項の規定により国土調査の指定を受け、国土庁の都道府県土地分類基本調査費補助金により、岩手県が事業主体となって実施したものである。
- 2 本調査成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
- 3 本調査は、下記作業規程準則に準拠して作成した「岩手県土地分類基本調査作業規程」に基づいて実施した。
 地形調査作業規程準則（昭和29年7月2日 総理府令第50号）
 表層地質調査作業規程準則（昭和29年8月21日 総理府令第65号）
 土壌調査作業規程準則（昭和30年1月29日 総理府令第3号）
- 4 調査の実施、成果の作成機関及び関係担当者は下記のとおりである。

調 査 担 当 者 一 覧

総合企画指導(54年度)	国土庁土地局国土調査課	専門調査官	西嶋輝之
(56年度)	〃	〃	榎倉克幹
総括(54年度)	〃 農政部構造改善課	課長	宇佐美忠
	〃	課長補佐	岩淵公夫
	〃	係長	菊池貢
(56年度)	〃	課長	高橋正男
	〃	課長補佐	藤沢実
	〃	係長	菊池貢
地形分類調査	株式会社 地域開発コンサルタンツ		
表層地質調査	株式会社 地域開発コンサルタンツ		
土 壌 調 査	農林水産省青森営林局	土 壌 係 長	松 尾 弘
	〃	農林事務官	三 上 毅
	県農業試験場	科 長	白 旗 秀 雄
	〃 (県南分場)	専門研究員	新 毛 晴 夫
開発関連調査	株式会社 地域開発コンサルタンツ		

(傾斜区分調査)

(水系谷密度調査)

(防災調査)

(起伏量調査)

協 力 機 関

国の機関	関係営林署
県の機関	関係農林事務所
市町村	圏幅内関係市町村

1981年12月 印刷発行

土地分類基本調査

焼 石 岳

編集発行 岩手県農政部構造改善課

岩手県盛岡市内丸10番1号

印刷 内外地図株式会社

東京都千代田区神田小川町3-22